

## 令和3年度 共通教育アンケート（1年次生対象）実施報告書

大学教育センター  
全学共通教育部門長 今井 航

### 1. アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について

令和3年度の学生対象の共通教育アンケート調査は、共通教育を中心とした学修についての、自由記述を含む39項目の設問により、令和4年1月5日(水)～2月28日(月)の予定で実施した。回答率は58.3%と、昨年度の71.4%に比べて下降した。昨年度は、実施期間を延ばしたが、今回は延ばさなかったことが理由の一つに考えられる。昨年度は、2月末日時点で53.1%であったから、これよりは今回は高かったと言える。

1年次生総数の800人中、回答したのは466人である。いつものように、担任等を通じて、学生に回答を促すのに協力された学科長はじめ各学科に感謝したい。ただ、学科毎の回答率を見ると、税務会計学科87.5%、機械システム工学科80.0%、薬学科83.0%のように高い学科がある一方、メディア・映像学科36.6%、スマートシステム学科23.5%、建築学科26.5%のように、全学平均を大きく下回る学科が見られる。学科により、毎年高い回答率を示すところと、再三にわたる依頼にもかかわらず回答率の上昇の見られない学科があることは遺憾である。

また、学部としての回答率は、薬学部83.0%（昨年度は89.8%）に次いで、生命工学部61.1%（昨年度は81.6%）、経済学部55.8%（昨年度は60.7%）、人間文化学部52.3%（昨年度は61.3%）、工学部48.7%（昨年度は73.7%）の順であった。

来年度以降、回答率の低かった学部・学科については、所属学生への働きかけなど、何らかの対応策を講じることを改めて求めたい。

### 2. 所属学部・学科のカリキュラム理解度および大学教育センターの学修支援体制理解度

所属する学部・学科のカリキュラム・マップについて、12.7%の学生（昨年度は9.1%。以下括弧内の数値は比較対照のために挙げる昨年度調査の結果）は「よく理解している」、50.6%（44.4%）は「だいたい理解している」と回答しており、6割強は理解している。一方、「少しだけ理解している」と回答したのは27.3%（35.5%）である。「まったく知らない」と回答したのは全学で2.1%、「まったく理解できていない」が1.5%、「聞いた（見た）ことがある」程度の者は5.8%と、1割弱の1年次生は所属する学部・学科のカリキュラム・マップについての理解がきわめて乏しいと言わなければならない。

今年度の回答を学部別に見ると、経済学部の回答者のうち2.4%、薬学部の回答者のうち3.6%、工学部の回答者のうち2.6%が「まったく知らない」と答えている。また、「聞いた（見た）ことがある」程度の者となると、経済学部7.9%、人間文化学部7.7%、工学部3.9%、生命工学部4.9%、薬学部3.6%となっている。

自学部のカリキュラム・マップについて理解の乏しい学生がかなりの比率を占めると、進級や卒業に履修が必須の科目の単位の取りこぼしなどにもつながる。カリキュラムの編成について、より適切な説明が学生に対して行われることが望まれる。

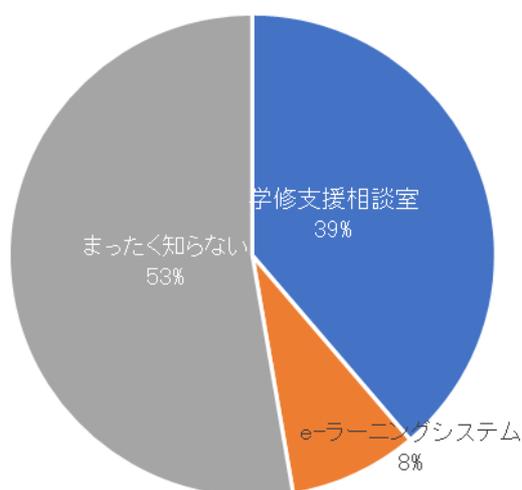
次に、大学教育センターが行っている各種の学修支援に関して、「まったく知らない」と回答した学生が回答者全体の52.7%（67.1%）にのぼった（設問2）。平成30年度のこの比率は35.5%であり、その後、周知方法の改善をあれこれ試みたが、令和元年度は却って増え、令和2年度はコロナ禍の下で対面の指導が制約を受けたことも影響したのか、さらに増えてしまった。今年度は減ったが、まだ半数以上は知らないという結果である。

学修支援相談室について知っている者については、昨年度の27.5%から今年度の38.8%

へと増加した。eラーニング・システムについて知っている者は、8.5%（5.6%）に留まった。

数学については、個別指導が行えるように、大学教育センターの特命講師が工学部生にはとくに焦点を絞って指導を行う措置を講じ、今年度も、特別のオンライン教材を開発し利用するなど、並々ならぬ努力が重ねられたが未だ利用が限られている。

## 設問2 大学教育センターの学修支援について知っているものを選んでください。



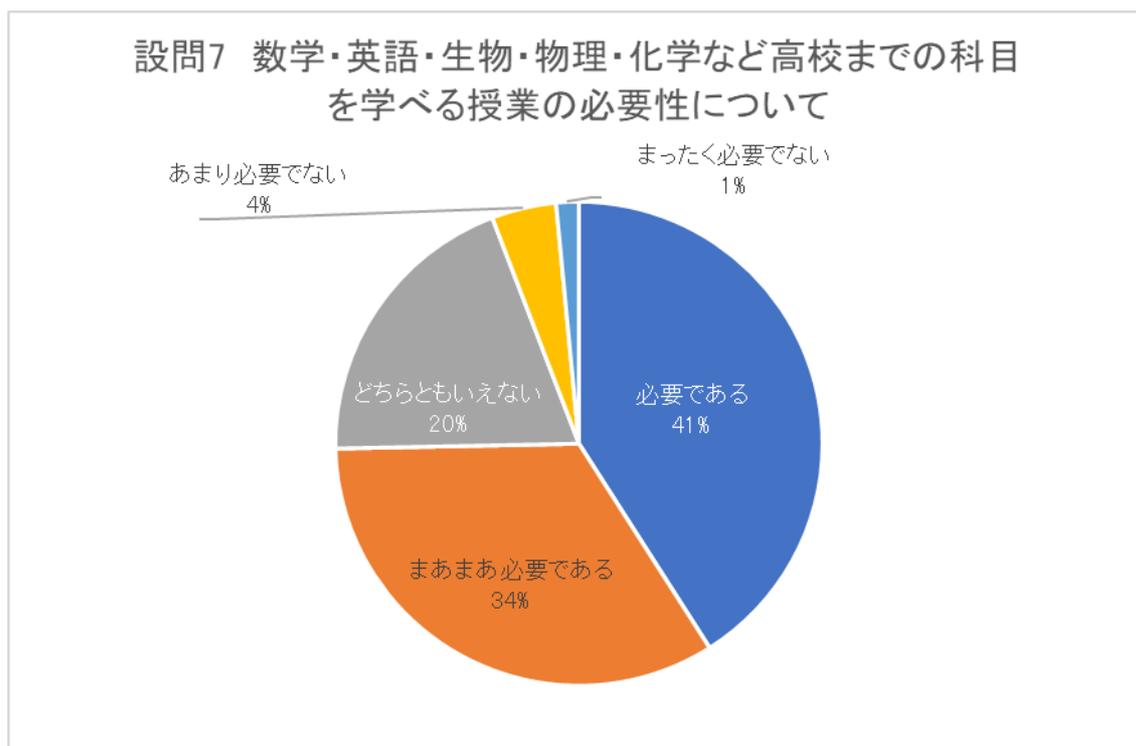
学修支援相談室を知っていると回答した159名に限り、その利用度を尋ねたところ、「まったく利用したことがない」が89.1%にものぼり、「よく利用している」0.6%、「まあまあ利用している」3.2%、「たまに利用している」7.1%に留まっている。

学修支援相談室を「まったく利用したことがない」と答えた学生が挙げた利用しない理由は、「利用する必要性がない」39.5%（34.1%）、「場所が分からない」28.5%（34.2%）、「時間が合わない」8.9%（10.8%）、「個別相談に不安（抵抗）がある」8.7%（6.5%）、「職員室のようで入りづらい」7.5%（6.9%）、「他人に知られたくない（周囲の目が気になる）」3.8%（2.8%）である。自由記述欄に「結局最初のオリエンテーションなどで具体的な場所を教えてもらわないと場所もわからないし、何をしているところなのかも具体的に想像できないので行かなかった」とあるように、利用者を増やすためには、入学間もない時期によく知らせることが必要であると思われる。その一方で、eラーニングシステムに関して、自由記述欄には「自分のペースで出来る」「何度も繰り返し取り組めて良かった」などのコメントが書き込まれていた。

種々の学修支援の提供実態について、新入生のオリエンテーションをはじめとする可能な機会を捉えて周知に努めるとともに、よりいっそう気軽に訪れることができる雰囲気づくりが必要である。本当に学修支援を必要とする学生に的確な指導が提供されるためにも、大学教育センターだけでなく、全学を挙げて学修支援体制の認知度の向上に努めていきたい。

高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要で

ある」が 41.0% (43.3%)、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は 33.7% (35.6%) で、昨年度に比べて僅かに低い比率である（設問 7）。7 割 5 分近くの学生がリメディアル教育に対する必要性を感じており、学修支援相談室が役立ちうる余地は十分にある。



高校までの科目を復習する授業の必要性に関連して、「必要である」「まあまあ必要である」と答えた 74.7%の学生に、どの科目のリメディアル教育が必要かを尋ねたところ、英語が 22.3% (24.6%) とトップである。次いで、数学 18.3% (17.5%)、化学 13.1% (11.7%)、生物 11.7% (10.5%) など理数系の科目が続いているが、国語も 9.7% (10.9%) が必要と回答している。学生が最も復習を必要とされている英語について、薬学部生は 10.5% (16.8%) が「必要」と答えているが、その他の学部は昨年度と同様に、いずれも 20%以上で、比較的復習の必要性を感じている。

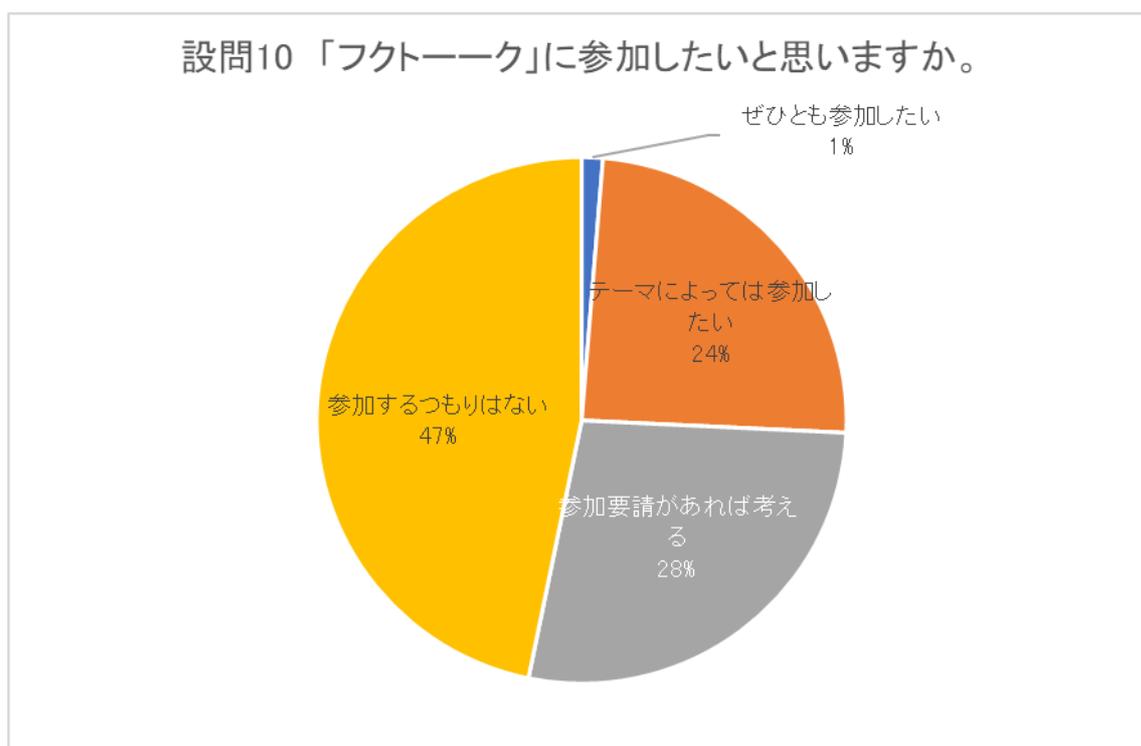
入学直後に行う英語プレイスメント・テストにおいても、英語力に弱点のある学生が多く見出されている。担当教員は、中学、高校での学習を繰り返すのではなく、大学生として楽しめる、また発見のあるように教材及び指導法に配慮しており、教え方を対話的にして興味をもたせるよう腐心し、再履修クラスも設定して復習的な指導を実践しているが、なおいっそうの工夫を凝らすことが求められる。

### 3. フクトークについて

大学教育センターでは、共通教育を中心として大学での学びに関する学生の生の声を聞き、教育改善に活かしていくための「フクトーク」と称する催しを毎年ほぼ年末に実施している。令和 3 年度は 12 月 8 日 (水) 16:30～17:50 に「思索する旅×創造旅行～教養教育科目 D 群 (思索と創造) を考える」をテーマとして実施し、参加した学生 27 名がグループに分かれて討議を繰り広げた。

「共通教育科目などについて教員と学生が考える企画「フクトーク」について知っていますか」との設問に対して、全体の 30.9% (33.6%) が「知っている」と回答し、他の 69.1% (66.4%) は知らないと答えた。続く「フクトーク」に参加したいと思いませんか」に対し

では、「是非とも参加したい」は1.3% (1.4%) に留まり、「テーマによっては参加したい」と答えたのは24.5% (22.1%) であり、他の者は「参加要請があれば考える」27.5% (28.0%)、「参加するつもりはない」46.8% (48.5%) と消極的である（設問 10）。毎年、自主的に参加する学生は限られており、大多数は各学科からの推薦や指名で参加する状況であるが、参加した後の感想には前向きなコメントが多く寄せられる。「フクトーク」における学生からの提案で生まれた韓国語やドローンを使った授業科目もあることから、引き続き各学科の協力も得て、さらなる充実を図りたい。

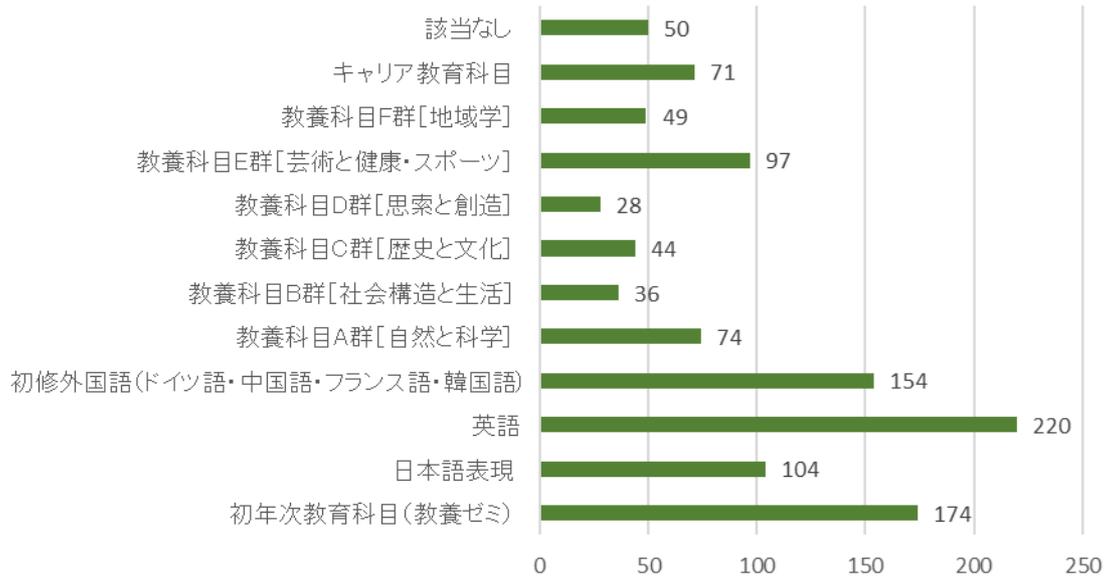


#### 4. 共通教育全体について

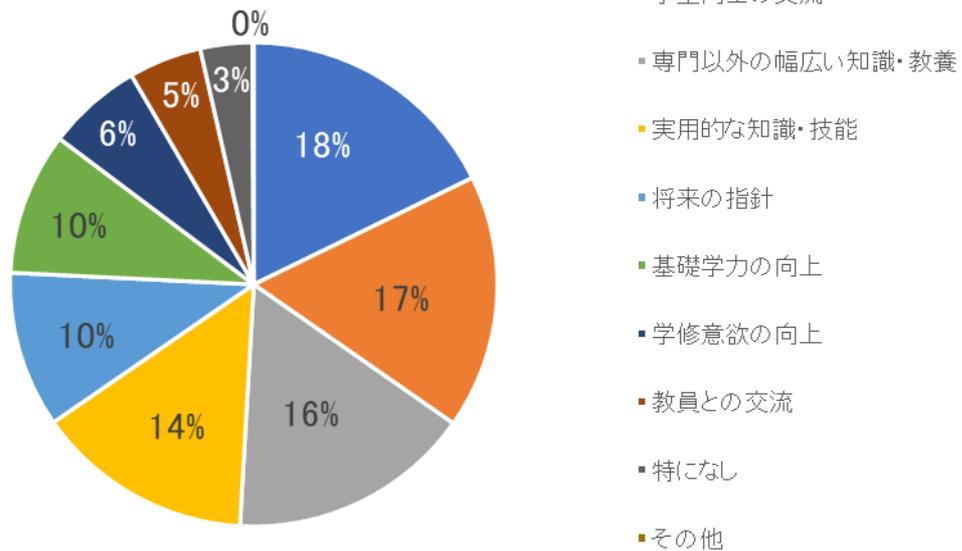
「共通教育科目で充実していると思われる科目群」は何かという設問では、上位から「英語」20.0% (18.6%)、「初年次教育科目（教養ゼミ）」15.8% (15.4%)、「ドイツ語・中国語・フランス語・韓国語など初修外国語」14.0% (15.8%)、「日本語表現法」9.4% (10.8%) と続き、教養教育科目の中では E 群の「芸術と健康・スポーツ」8.8% が最も多く、A 群の「自然と科学」6.7% と続き、最も少ないのは D 群の「思索と創造」2.5% であった（設問 11）。この D 群や B 群「社会構造と生活」3.3% や C 群「歴史と文化」4.0% の充実を図る必要があると見られる。

「入学当初、共通教育に期待していたこと」は何かという設問では、上位から「専門での勉強の基礎」17.7% (17.3%)、「学生同士の交流」17.0% (17.7%)、「専門以外の幅広い知識・教養」16.2% (15.3%)、「実用的な知識・技能」14.4% (14.3%)、「将来の指針」10.4% 等の順になっている（設問 12）。「将来の指針」が昨年度よりも順位を上げている。大きな災害を目の当たりにし、また、コロナ禍に生きる、学生たちの将来に対し、これまで以上に思いを寄せる必要があるのかもしれない。「教員との交流」は4.8% (4.6%) と、昨年よりわずかな上昇に留まった。こうした時世であるからこそ、教員の側から積極的に働きかけることで、本学の教員が学生に専門性や人間性において他所では得られない大きな影響を及ぼすことを期待したい。

設問11 共通教育科目で充実していると思われる科目群を選んでください。(全学)

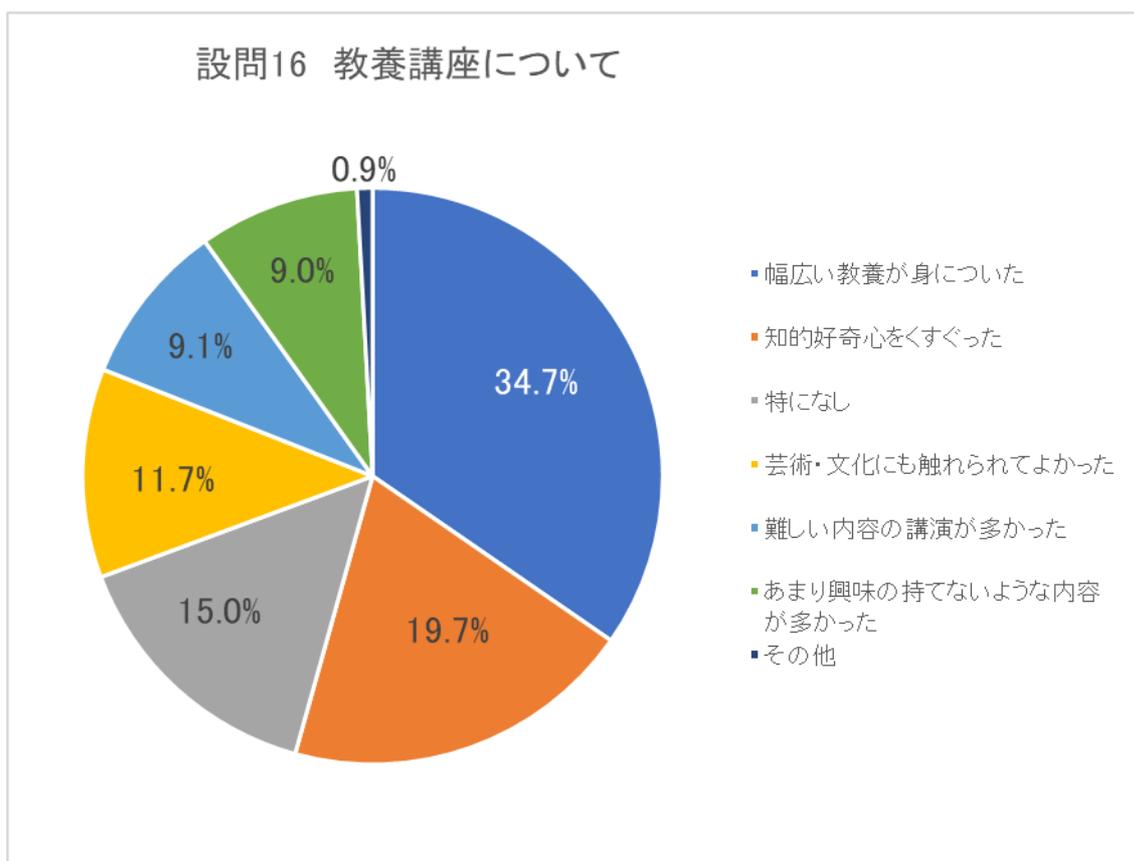


設問12 入学当初、全学共通教育に対して期待していたことを選んでください。



次に、これらの「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」を%で回答することを求めたところ、満足度 80%と回答した学生が最も多く、その割合は 24.7%である。昨年度は 70%と回答した学生が最多であったから、この点は評価されてよい。また、満足度 100%~70%の学生の合計は、全体の 54.7% (46.8%) を占めた。この数

値は、一昨年度から昨年度へほぼ倍増し、今年度も増加している。

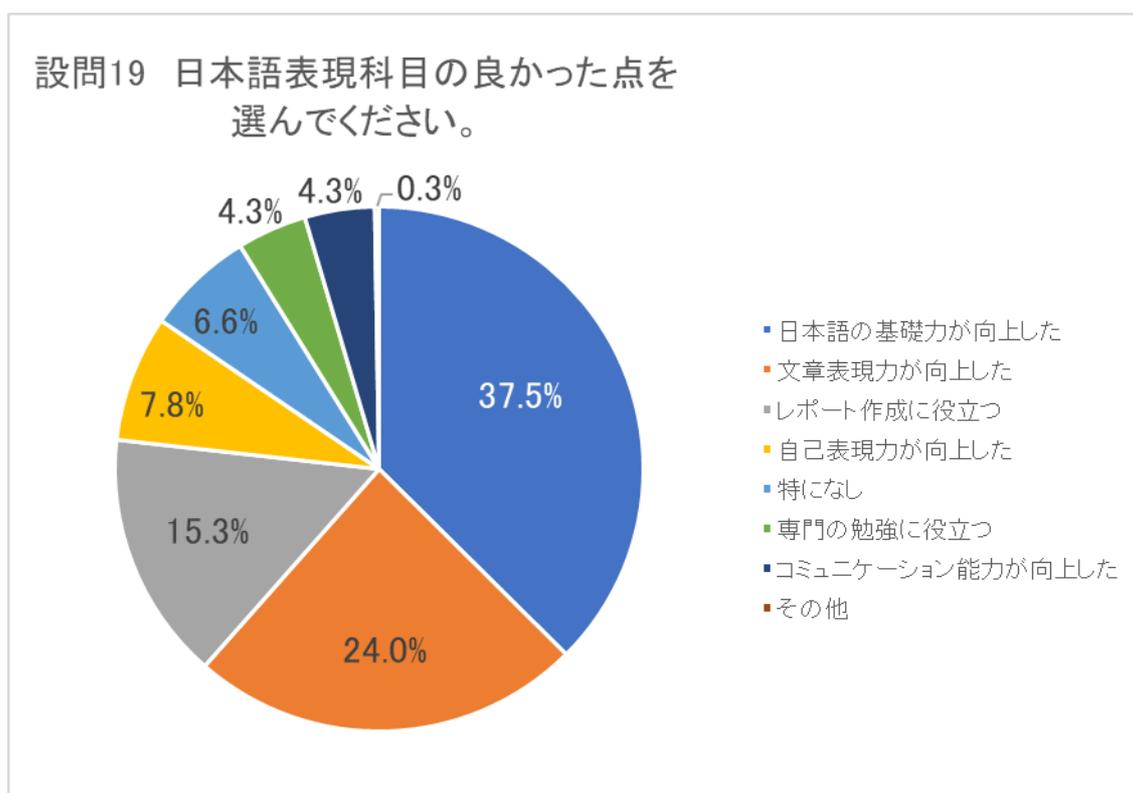


初年次教育科目として開設されている教養ゼミを履修して良かった点については、上位から「大学生としての学修スキルが身についた」16.2% (15.3%)、「高校生活（学習）から大学生活（学修）へスムーズに移行できた」14.2% (11.8%)、「コミュニケーション能力が向上した」10.5%等の順になっている（設問 14）。

一方、教養ゼミの改善点については、「特に改善点はない」という回答が 45.6% (47.1%) と最も高い比率であるが、これに次いで「コミュニケーションの場がもっとほしい」14.1% (15.3%)、「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」12.8% (10.1%)、「学生の予備知識や理解度をもう少し考慮して欲しい」「授業の進め方をもう少し工夫して欲しい」がいずれも 7.7%といった順になっている。教養ゼミの改善点として挙げられた学生の意見には、「将来社会に出るために必要な知識や職業に関することについてももっと詳しく教えて欲しい」「学外での活動をやりたかった」といったコメントが見られた。

本学で創設以来続いている教養講座に関して、令和 2 年度は会場での密を避けることが不可能であったため、予定されていた 5 回の講座がいずれも実施できなかったが、令和 3 年度は、感染予防を重視し、この伝統的催しをオンラインで開催した。上位から「幅広い教養が身についた」34.7%、「知的好奇心をくすぐった」19.7%、「特になし」15.0%、「芸術・文化にも触れられてよかった」11.7%等の順になっている（設問 16）。

## 5. 語学・リテラシー科目について



日本語表現法については、「とても満足した」21.5% (20.9%) と「ある程度満足した」50.9% (51.2%) を合わせると 72.4% (72.1%) となり、概ね良好としてよいと思われる。日本語表現法の難易度に関しては、「今の程度の内容でよい」81.1% (82.0%)、「今以上に高度な内容が必要」6.0% (8.2%) である。一方で「今より少ない内容でよい」とする者が 9.4% (7.9%)、「まったく必要性を感じない」者も 3.4% (2.0%) いる。

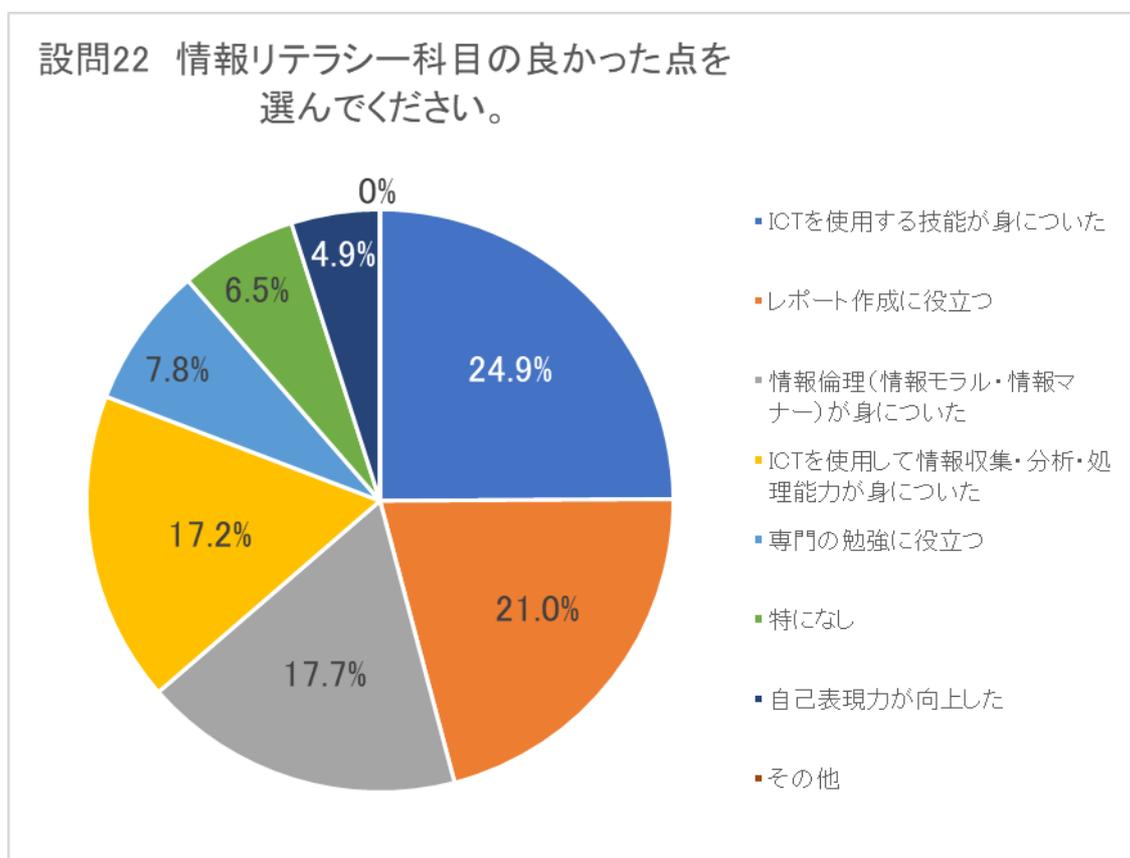
日本語表現法の授業で良かった点を尋ねたのに対して、「日本語の基礎力が向上した」37.5%（35.3%）はシラバスで謳っている前半の目標、「文章表現力が向上した」24.0%（23.1%）と「レポート作成に役立つ」15.3%（18.6%）は後半の目標に相当するところである（設問19）。こうしてみると、授業の目標は概ね達成されているようである。

本学の情報リテラシー科目は、1年次生を対象とした科目で、高校で学んだ情報科目についての復習と大学教育で必要な最低限のスキルを学ぶ高大接続の要素をもっている。

情報リテラシー教育の満足度を見ると、「とても満足した」31.8%（28.8%）、「ある程度満足した」45.1%（47.7%）と、8割弱の学生が満足を表明している。また、回答者の81.1%（83.2%）は「今の程度の内容でよい」としている。

何が良かったかを尋ねたところ、「ICTを使用する技能が身についた」24.9%（25.0%）、「レポート作成に役立つ」21.0%（22.3%）、「情報倫理（情報モラル・情報マナー）が身についた」17.7%（16.8%）、「ICTを使用して情報収集・分析・処理能力が身についた」17.2%（17.2%）等の順になっている（設問22）。

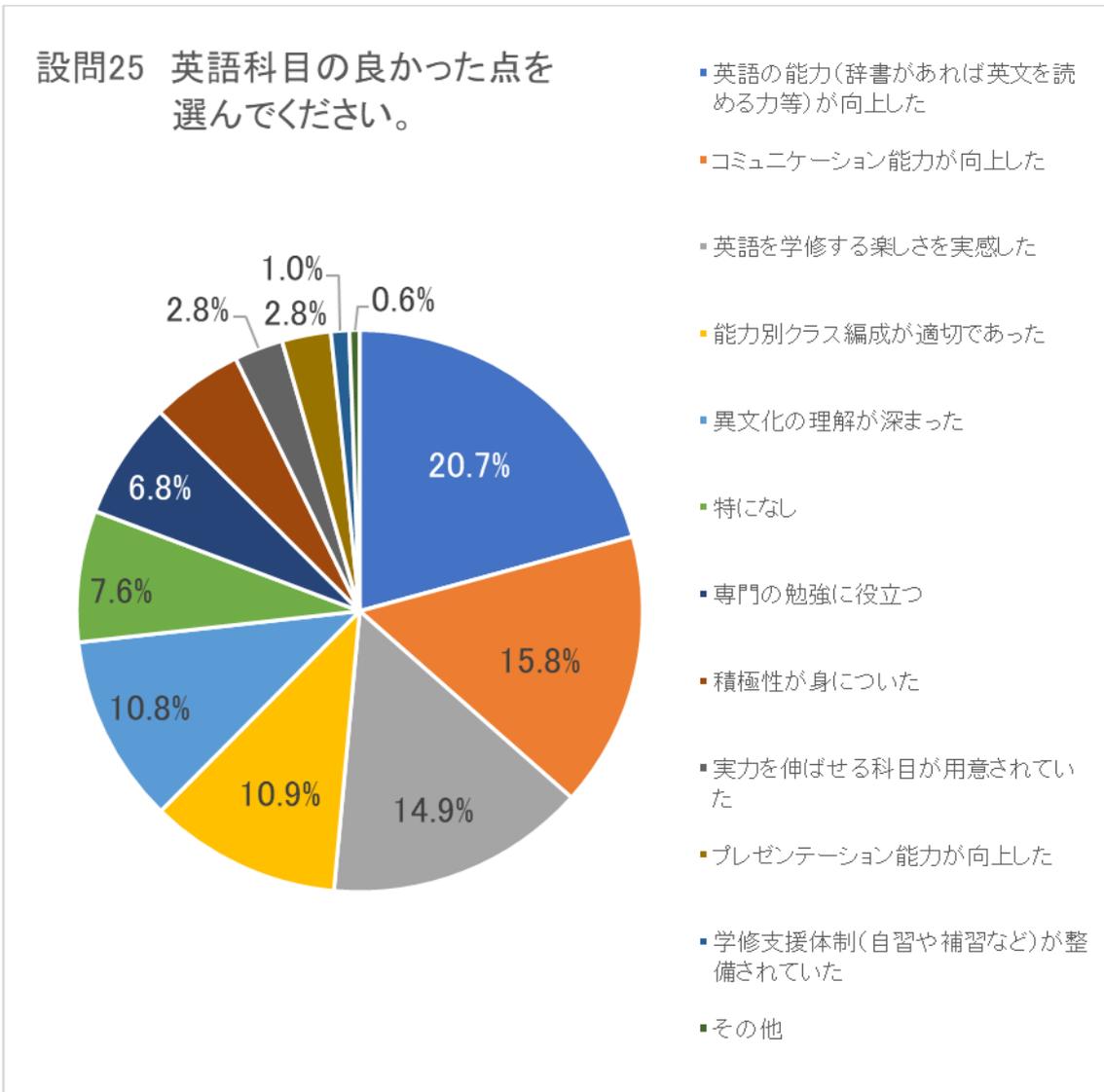
情報リテラシーは大学生の学修や生活にとって不可欠な知識やスキルであり、加えてSNSをはじめとする情報サービスの使用には高度なモラルが求められている。スキルの熟達のみならず、モラルに適する態度形成に向けてもいっそう充実した教育の展開が望まれる。



英語については、全学において、「とても満足した」26.4%（23.3%）、「ある程度満足した」50.9%（50.0%）を合わせると、77.3%（73.3%）が満足感を示している。これには、教材の難易度、教員の教え方、単位の取り易さなど、複合的な側面が含まれており、学生がどの面での力、英語学力、集中力、努力する力などをどのように伸ばしたかを、明確に捉え

る評価法の開発が引き続き望まれる。「今以上に高度な内容が必要」とした学生は 12.0% (12.9%) に留まり、「今の程度の内容でよい」が 71.5% (74.5%) と多数を占めている。「今よりも少ない内容でよい」とする者が、全体では 14.8% を占めた。

次に、英語科目の良かった点については、「英語の能力(辞書があれば英文を読める力等)が向上した」が 20.7% (23.8%)、「コミュニケーション能力が向上した」が 15.8% (12.8%)、「英語を学修する楽しさを実感した」が 14.9% (15.4%)、「能力別クラス編成が適切であった」10.9% (10.4%) の順であった(設問 25)。英語科目の良かった点について、自由記述欄に記入された内容を見ると、あるネイティブ教員の授業について「元々英語があまり好きじゃなかったが、先生のおかげで楽しく学ぶことができ、英語が好きになった」と好意的なコメントが寄せられており、「海外出身の先生による発音がとても勉強になった」というオールイングリッシュで行われる授業への評価が見られた。



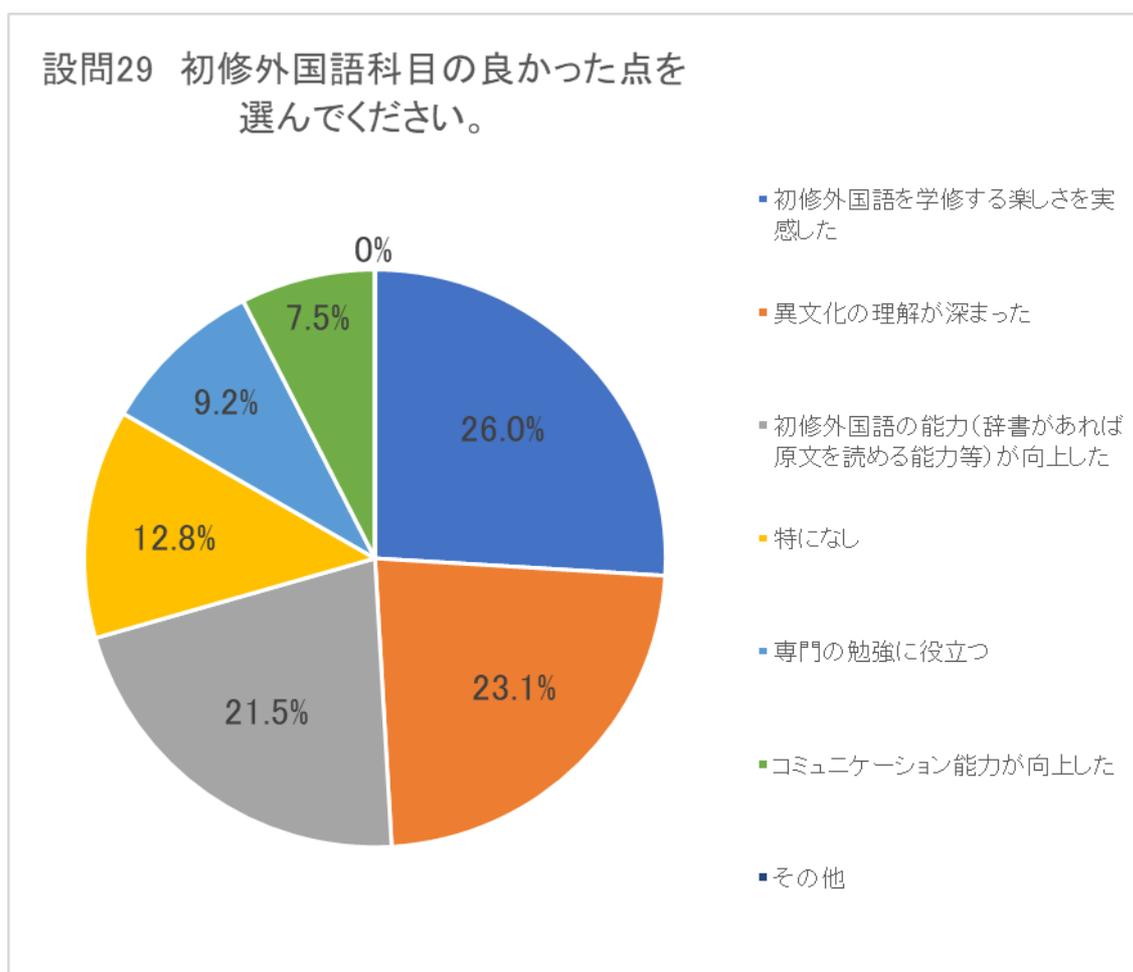
「初修外国語」のどの語種を選択したかについての設問に関して、回答したのは延べ 384 人である。回答者総数は 466 人であるから 82 人はこの設問に答えていない。薬学部については、初修外国語の履修を義務づけておらず、希望する者のみが学ぶことになっていることが主たる原因であろう。また、複数の初修外国語を学んだ学生も少数ながら含まれているこ

ともありうる。この結果、回答者を語種別に見ると、中国語が 51.3% (46.6%)、韓国語が 24.7% (23.6%)、ドイツ語が 12.2% (15.4%)、フランス語が 11.7% (14.4%) の順になる。括弧内に示した昨年度の比率を見ても分かるように、初修外国語の履修は希望によることを基本としているため、年度による履修者割合の変動が起こる。平成 30 年度に新設した韓国語の履修者は中国語に次いで第二位を維持している。

これら初修外国語 4 言語の学修に関して、「とても満足した」は 22.4% (26.4%)、「ある程度満足した」は 44.2% (51.6%) と、6 割 5 分強が高く評価しており、「あまり満足しなかった」9.0% (3.9%)、「まったく不満だった」3.1% (1.4%) を上回っているものの、昨年度に比べて低い評価を付ける者が増えたと見られることは、気がかりである。この点、そもそも外国語を学ぶことへの興味関心の有無ということを考慮しなくてはいけないかもしれない。授業の難易度について、「今以上に高度な内容が必要」は 5.2% (4.4%)、「今よりも少ない内容でよい」は 22.0% (14.8%) であった。

多くの学生にとって初めて学ぶ初修外国語は、中高での英語学修の「しがらみ」を離れ、語学やその背景にある当該国の文化を学ぶ楽しさを伝えられるよう、教育内容や教授法に関して、なおいっそうの工夫が望まれるところである。

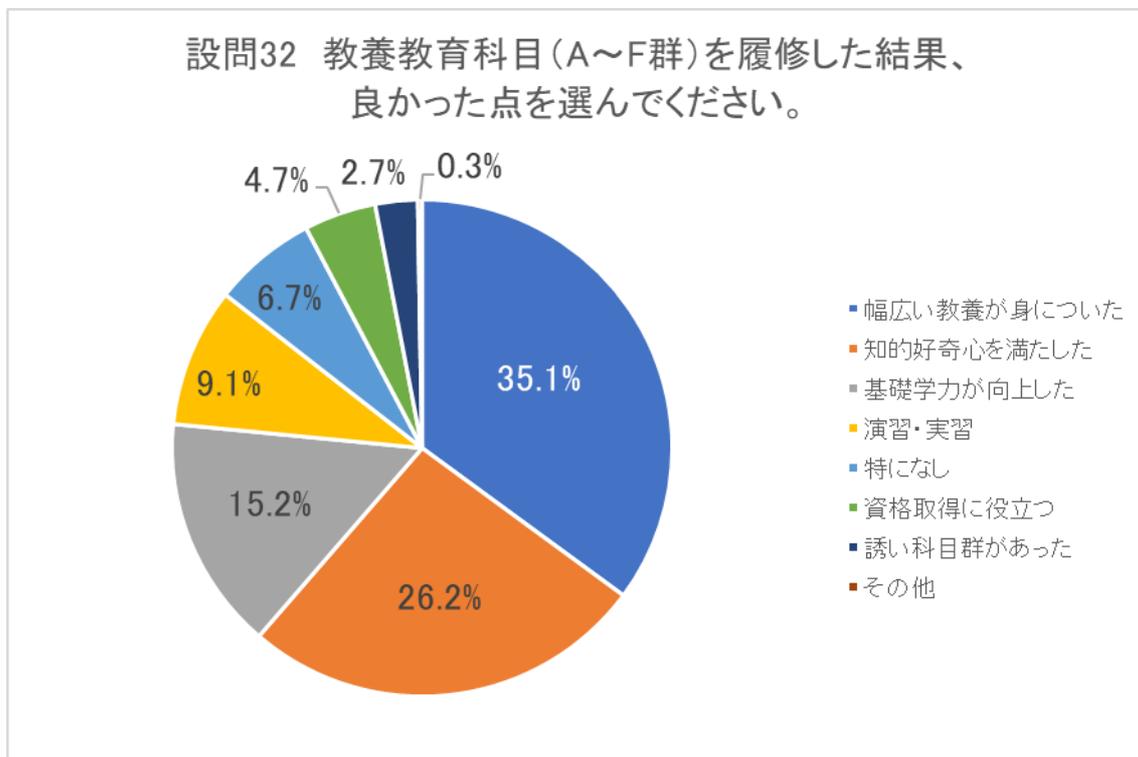
「初修外国語の良かった点」については、「初修外国語を学習する楽しさを実感した」26.0% (30.1%) がトップであり、「異文化の理解が深まった」が 23.1% (24.1%)、「初修外国語の能力(辞書があれば原文を読める能力等)が向上した」21.5% (25.2%) がこれに次いでいる。「専門の勉強に役立つ」を選択した学生は 9.2% (5.9%)、「コミュニケーション能力が向上した」7.5% (5.6%) であった(設問 29)。



## 6. 教養教育科目について

教養教育科目（A～F 群）を全体として見た授業時間数と内容について、「今の程度の内容でよい」と回答した学生が 87.3%（86.5%）を占めた。「今以上に高度な内容が必要」と回答したのは 3.2%（5.3%）、逆に「今よりも少ない内容でよい」と回答したのは 8.4%（7.6%）であった。

教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」42.1%（42.7%）、「基礎学力の向上」19.5%（22.0%）、「専門に役立てる」17.6%（12.6%）の順である。その一方、「単位数稼ぎと時間割の穴埋め」という、消極的なねらいを選択した学生は 17.4%（17.4%）と、昨年度と同じ割合であった。



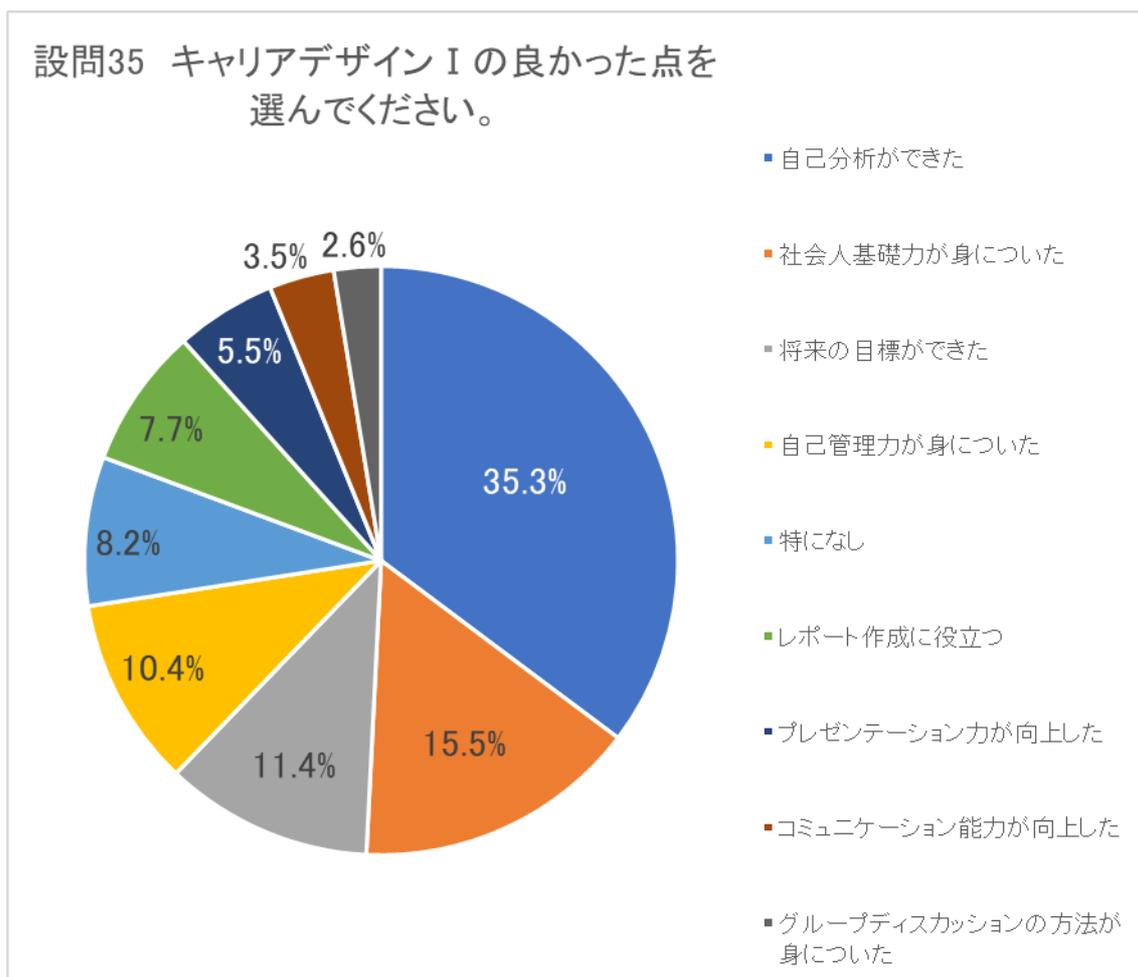
教養教育科目を履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」35.1%（31.9%）、「知的好奇心を満たした」26.2%（28.0%）、「基礎学力が向上した」15.2%（15.6%）の順であり（設問 32）、この設問に対する回答の傾向は、この 4 年間で同様である。

## 7. キャリア教育（1 年次履修のキャリアデザイン 1）について

「キャリアデザイン I を受講して将来役立つ力が身に付いたと思いますか?」と、この科目に対する満足度を尋ねたところ、「とても思う」が 29.2%（29.2%）、「まあまあ思う」45.9%（45.6%）と、4 人中 3 人近くの者が将来役立つと回答した。逆に、「あまり思わない」4.3%（3.2%）、「まったく思わない」2.8%（2.4%）と回答した者も見られた。

キャリアデザイン I の難易度については、「今の程度の内容でよい」80.7%（82.0%）、「今以上に高度な内容が必要」3.4%（4.7%）という回答の一方で、「今よりも少ない内容でよい」12.7%（9.8%）や、「まったく必要性を感じない」3.2%（3.5%）と回答した学生もい

る。引き続き、一年生からキャリア教育が必要になってきている社会的背景（例：就職活動の早期化・多様化など）の説明をしたり、自らキャリアをデザインすることの重要性について啓発活動をおこなったりしていくことが必要不可欠だと考える。



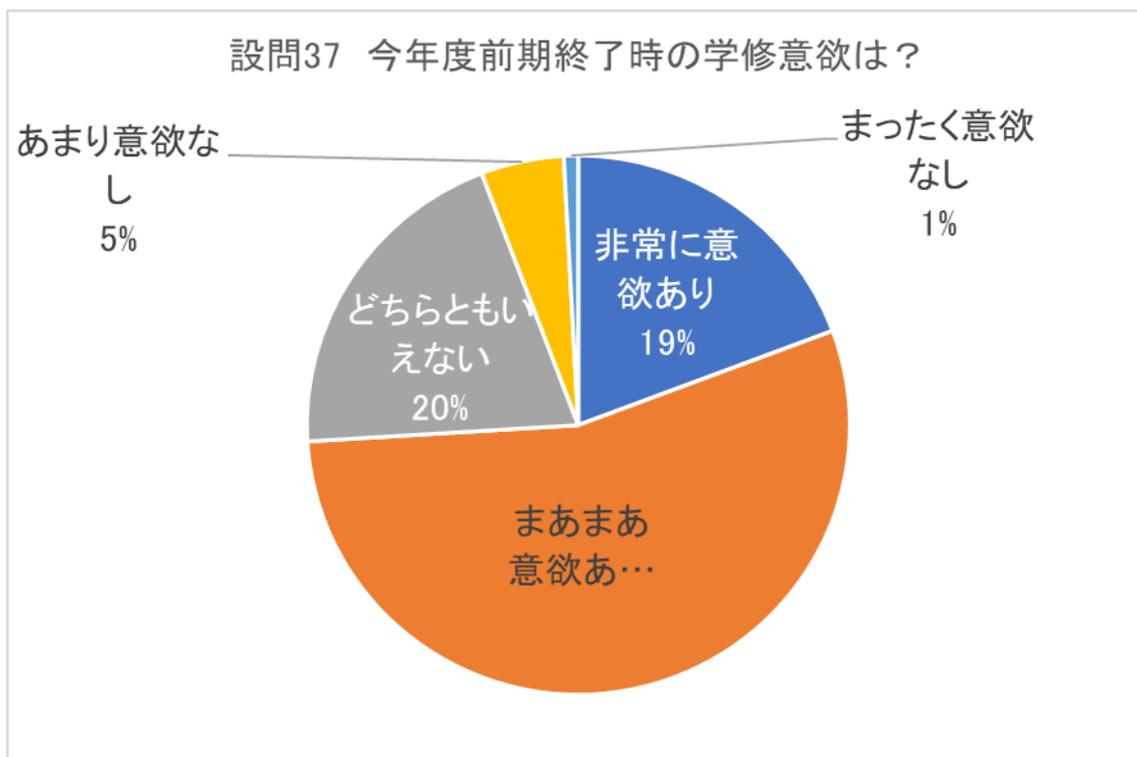
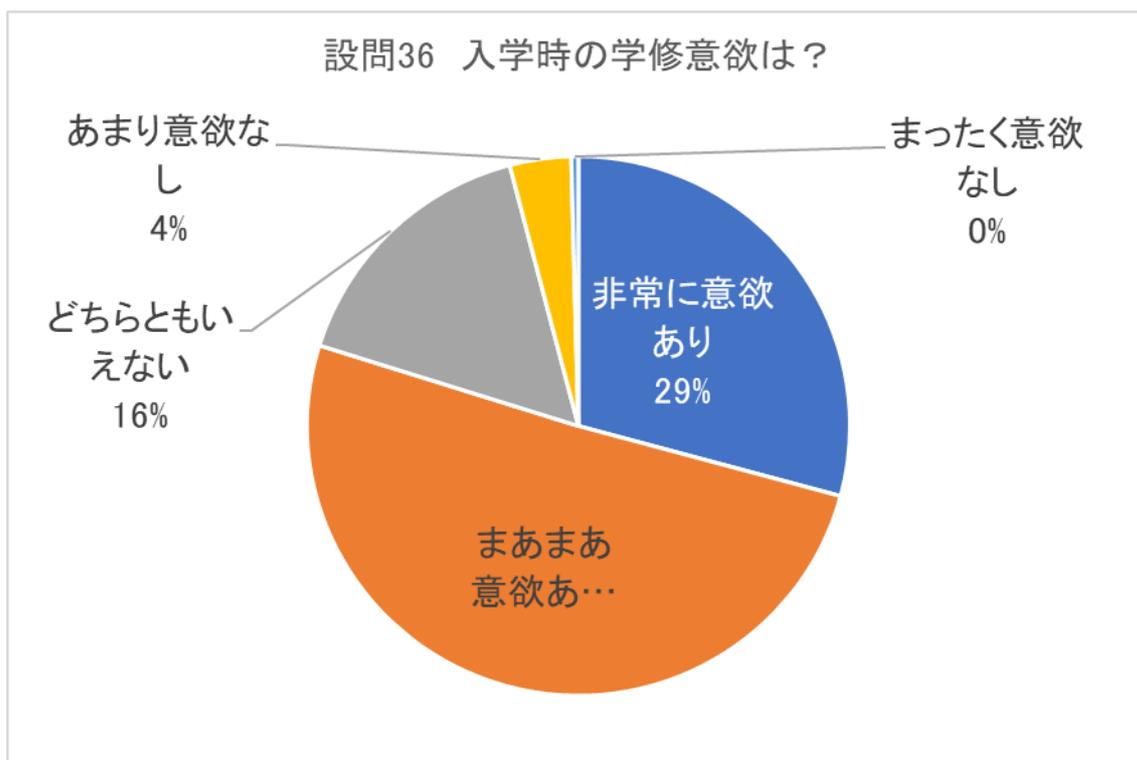
キャリアデザイン I を履修して良かった点については、その上位 3 項目を挙げると「自己分析ができた」35.3% (32.1%)、「社会人基礎力が身についた」15.5% (14.7%)、「将来の目標ができた」11.4% (11.5%) であり、あと「自己管理力が身についた」10.4% (12.1%) が続く（設問 35）。「自己管理力が身についた」と「将来の目標ができた」の順の入れ替わりが昨年度の結果と異なる。

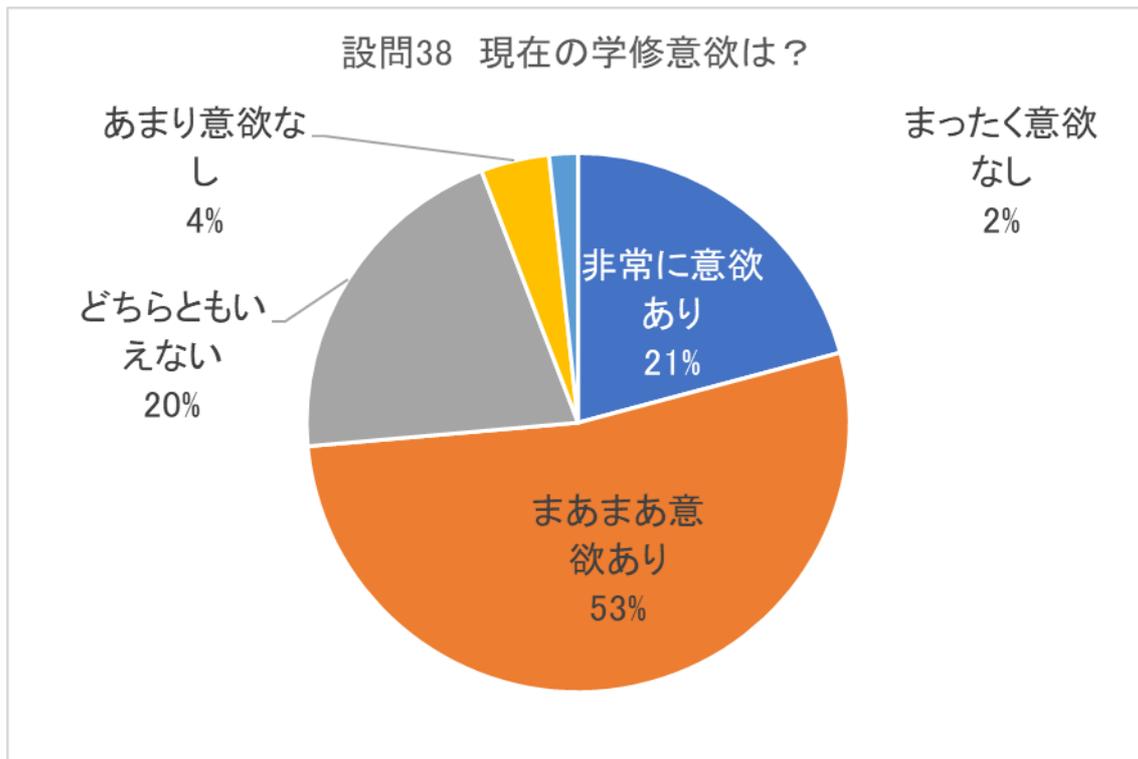
## 8. 学生の学修意欲について

本年度 1 年次生における学修意欲についての質問項目では、入学時に「非常に意欲あり」29.2% (34.7%)、「まあまあ意欲あり」、50.6% (51.1%) と自己分析している。この数値は前期終了時に、それぞれ 19.3% (19.2%)、54.7% (52.4%) に変わり、さらに学年末に当たる今回の調査実施時には 20.8% (23.9%)、52.8% (48.8%) となっている（設問 36～38）。括弧内の昨年度の数値と比較すると、若干後退気味に見える。

一方、「あまり意欲なし」「まったく意欲なし」と回答した学生の合計の割合は、入学当初 4.0% (3.2%)、前期終了時 5.8% (8.8%)、学年末 5.8% (7.6%) で（設問 36～38）、意欲のない状態で入学し、その後、昨年度に比べれば割合が低下しているものの、その状態は少

し悪化していることが見て取れる。留年や退学防止の観点から、学修意欲の乏しい学生層に対する取り組みは、いっそうの改善を図る必要がある。





## 9. アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえ、また、本文ではあまり触れなかった自由記述意見にも触れながら、全学共通教育の現況と改善策について今少し述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、回答期間を延長しなかったせいか、昨年度に比べて回答率は下降した。冒頭で見たように、それでも一昨年に比べれば、その割合は高く6割弱であった。学生への一斉メールでの回答要請の他にも、大学教育センター運営委員会の委員である各学科長を通じて調査への協力を学生に呼びかけた努力の結果と言っておきたい。今後も、回答期間は延長することなく、決められた期間内で終わるようにしていきたい。そのうえで、今後とも共通教育担当教員の協力を得つつ、各学科の先生方の協力をお願いしながら、たとえば授業時間中に調査への回答依頼を教室で学生に直接伝えるなど、粘り強く協力要請を続け、回答率の上昇を期す。

大学教育センターが行っている各種の学修支援についての認知度の低さを深刻に受け止め、改善策を講じなければならない。eラーニング・システムについても同様である。「自分のペースで出来る」「何度も繰り返し取り組めて良かった」など好意的なコメントが見られた反面、「本学の要項を読んでいなければ何なのか分からない」など、技術面、操作面での不都合を指摘する以前に、それがあつこと自体がよく知られていないことが窺われる自由記述が散見された。新入生オリエンテーションを初めとする各種の機会を捉えて、引き続き周知、広報に努める必要がある。

このコロナ禍で、教員が励まされるような自由記述が見られた。例えば「コロナ禍で大変な中、私たち生徒のために様々な工夫をありがとうございました。来年度もよろしくお願ひします」「どの科目も分かりやすく講義をされており、遠隔授業でもしっかりと勉強が出来たので良いと思います」等である。反対に、次のような自由記述からは、問題点を確認し、課題を具体的に設定し、一つ一つ改善していかなければならないと受け止められた。「学生か

らアンケートをとり、科目を増やす等を行うと良いかもしれません」「オンデマンド方式で授業を行う場合、もう少し動画が短いかつ、もっと興味が持つようにわかりやすくしてほしい」などである。前者については、とりわけ教養教育科目のB~D各群の充実が求められるだろう。後者については、他大学の教員から耳にするところでも、動画の長短は問題視されており、短くないと学生の学習が長続きしないようである。オンデマンド方式における動画時間の適切な長さが検討されてもよいだろう。意欲との関係でも捉えておきたい。